みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.107

GIGAスクール問題Ⅲ

子どもの風景 第6回

先生のモテ期

蒼（小3）

学校で名前うらないを見ました。ちひろちゃんのを友くんと見たらあって、「自分で知らないことがある」と書いてありました。友くんが、

「ち、だから、ちかえ先生の名前は。」

と言っていました。ぼくは、

「いいね。」

と言いました。先生に、

「名前さがしていい。」

と言ったら、

「いいよ。」

と言われました。

さがしている時、先生が、

「だいたい、のっていないんだよね。」

と言いました。

「ありましたよ。」

と言ったら、先生は、

「のってないでしょ。」

と言っていました。友くんが、

「本当ですよ。」

と言いました。先生に言ったら、

「本当にあるじゃん。」

と言いました。

そしたら、

「モテ期、19才。」

と書いてありました。ぼくは、

「先生、モテ期19だけど、すぎてるよ。」

「先生、モテたの。」

と言ったら、先生がわらいました。

それから、こんなことも書いてありました。

「がんばり屋だけど、目ひょうを決めるまでは、時間がかかるかも。」

ぼくは、先生に、

「昔は、がんばり屋だった。」

と言ったら、先生がわらって、

「今、がんばり屋じゃないってこと。」

と言いました。ぼくは、

「やってよかった。のってよかったな。」

と思いました。

目次　2022年6月

子どもの風景（第６回）　1
子どもと学校
子どもの「なんで？」を大切にしながら　遠藤　颯　2
授業への招待⑥　ずこう　土屋　聡　4
わたしの出会った先生 36
面倒くさい人間　森　彩香　6
仲間の本
瀬成田さんの共育実践力を次世代の教師たちへ　千葉　保夫　7
特集 GIGAスクール問題 Ⅲ
待てよ！ 授業づくりの大転換
～ちょっと深く考えてみたい　数見　隆生　8
子どもとして生き、
成長することのできる学校を　鎌田　克信　9
本当の「主体的・対話的で深い学び」
久保　健　13
米づくりから考えてきたこと　小野寺勝徳　16
読者の声（はがき・メールより）　19
子どもの生きづらさと今 Ⅱ
manacoと２年間　中野柊一郎　20
新しい「学校」を求めて　八巻　寛治　21
おすすめ映画
『ドライブ・マイ・カー』の２人に注目してみた　加藤　修二　22
読書のすすめ（第８回）　久保　健　22
相談センター報告　（第27回）
相談員１年目を振り返って　内記　英明　23
ひと言　三つの“nation”と平和　本田　伊克　24
子どもの風景　作品について　堀籠智加枝　24
センターの動き・編集後記　24

表紙写真：清岡修　題字：江島隆二

子どもと学校

子どもの「なんで？」を大切にしながら

遠藤　颯

「先生、おはようございます。」（子ども）
「○○さん、おはよう。」（私）
「やったー。今日も先生にあいさつでっぽうううてた。」（子ども）

毎朝、教室ではこのやり取りが行われています。私より先にあいさつができたら「あいさつでっぽうがうてた」、逆に私の方が先にあいさつをしたら「あいさつでっぽうをうたれた」となっています。これは、自分からあいさつができるようになってほしいと思い、始めた取り組みです。最初は楽しくてあいさつをしていた子どもたちも、今では自分からあいさつすることが当たり前となり、校長先生や他の先生にも自分からあいさつしている様子が見られます。

今年度初めての1年生担任になった私は、このように素直に取り組む子どもたちによって、日々喜びを感じています。1年生を担任すると決まったときから、「とうとう1年生を担任できるんだ！」と、うれしくてたまりませんでした。入学式で初めて出会ったときの喜びは、今でもよく覚えています。

しかし、初めての1年生担任は、戸惑うことの連続でした。入学式翌日から、
「○○はどこに置くの？」
「○○ができない。」
と一気にたくさんの質問やお願いがきて、右往左往してしまいました。1年生はゼロからのスタートだということを実感させられました。そして、今まで担任していた高学年の子どもたちが、当番活動などを声掛け一つでできたのは、低学年の先生方が日々細かく指導してきたからこそなのだということにも気付かされました。同時に、一つひとつの土台を、今年は自分がしっかり築いていかなければいけないという思いが強くなりました。

そんな私に応えてくれるかのように、ロッカーや机の整理の仕方、靴箱や手洗い場の使い方、給食や掃除の流れなど、初めてのこともどんどん覚えようと頑張る子どもたちの姿を見て、何度も感心させられました。

「先生、机の中ちゃんとからっぽになったよ。見て」
「ロッカーから体操着袋のひもが出ていたから直してきたよ」
「給食当番って大変かと思ってたけど、みんなに分けてあげられて楽しい」
など、新しく覚えたことを嬉しそうに報告してくれるたびに、私も嬉しくなります。

学習面でも、子どもたちは、たくさんのことを吸収して成長しています。入学して間もないときから、早く鉛筆や教科書を使って勉強したいという意欲が溢れていた子どもたちは、ひらがなや数字の書き方、音読などに意欲的に取り組んでいます。特に音読では、1回読むたびに教科書に丸をつけ、20回を目標に取り組んでいます。中には40回以上音読して、上達した読み方を聞かせてくれる子もいます。

1年生の子どもたちに、特に感心させられることは、「知りたい」という気持ちの大きさです。特に、「なんで？」という気持ちはものすごく大きく、大人には気付かない視点から疑問を投げかけられ、一緒に考える楽しさもあります。ある日、黒板に「赤で書きます。」とチョークで書きながら説明しているときに、

「なんでピンクなのに赤なの？」

という、考えていなかった角度からの質問がとんできました。確かに、よく見たら赤よりもピンクに近いなと思いましたが、この色は赤と疑ってもいなかったので、上手に答えることができませんでした。その他にも、ひらがなとカタカナの「へ」はなぜ一緒なのか、信号は緑色なのになぜ青と呼ぶのかなど、日常から「なんで？」を見付けては質問が飛んできます。すぐにタブレットで調べて教えるようにしてからは、私が何でも知っている博士と思ったようで、次々に新しい質問を用意しては困らせてきます。

昨年度、5年生を担任していたときも、子どもたちの「なんで？」に何度も出会いました。そして、それらは特に授業中に大活躍しました。国語と道徳の時間には、その「なんで？」を中心に話し合いを進めていきました。国語では、「なぜ紳士の顔だけが元通りにならなかったのだろう？」（注文の多い料理店）という疑問から、物語の主題にせまる話し合いができました。道徳では、「もし何でも許してもらえる世界だったらどうなるだろう？」（寛容）や「本当にどんな場面でも嘘をついてはいけないのかな？」（誠実）といった疑問から、道徳的価値について考えました。

6月になり、徐々に1年生の「なんで？」も授業の深まりにつながるものが出始めました。『とんとことん』と『とんとんとん』は何がちがうのだろうか？」（国語）や「『あわせて』があったら絶対たし算になるの？」（算数）など、なかなか鋭い視点からの疑問です。今まで何気ない疑問を大切にしてきたことが、授業中にもつながっていると感じました。今後の授業も、より楽しみになっています。

今の子どもたちに出会ったことで、知らなかったことを自分なりに調べ、新しい発見をすることができました。同じように、今まで担任してきた子どもたちとの出会いも、新しいことに気付かせてくれる素晴らしいものでした。自分の授業準備や見通しの甘さにも気付かされ、「なんでうまくいかなかったのか？」を考えることにつながり、教師として成長することにもつながっています。これからも、子どもと一緒に学び続ける教師でありたいと思います。だからこそ、子どもの「なんで？」を大切にしながら、自分自身も「なんで？」を考え続けていきたいと思います。

（白石市・教師）

授業への招待 ⑥

ぞうさん

土屋 聡

感動させてもらいましょう

図工には、正解がありません。授業者は「正解にたどりつかせる」ことを任務としがち。あなたは、どうですか。

よく見る・気づく

まなざしの大切さ。気づきを大切にし研くことです。教科枠を越え、毎日のこと。

たとえば植物の観察。「どう？　何か気づいたことはありませんか」と尋ねます。昨日とちがうところ・同じところ・何に似ているかなど。目のつけどころの観点を細かく示すと、自分の気づきが薄まり、授業者の設問に受動的になりがちです。期待される正解を探すのではなく、自分で気づくこと。授業者がそれを大切にすると、安心して表現できるようになります。「あたり、はずれ」という機会を少なくすると、お互い楽かもしれませんね。

手はすごい

児童の手は、新しい世界を見せてくれます。輝かしいです。

可能性に富んだクレヨン。紙、石、ペットボトル……いろんなものに描けます。力いっぱいグリグリすると元気になります。「どんな学級にしたい？」と投げかけ、八切画用紙に色を重ねます。言葉と名前を入れ、いい感じに切ります。一枚できたら、おかわり。じゃんじゃん作って黒板にどんどん貼ります。共同制作として教室の壁面掲示にぴったりです。ぜひ高学年でも。抽象表現は自分に向き合う活動です。

心に身体に残る

手が生み出すのは、描画だけではありません。工作・粘土・折り紙・包装……。物と物を接着させたいとき、ボンドを使うことがあります。直ぐにくっつくイメージ。でも思い通りにはいきません。細い木材に太い釘では、木材が割れます。これらを迂回せずに経験することこそ、学びです。

授業者が指示する通りに、全く迷いなく考えることもなく手順を踏む活動は、心にも身体にも何も残らないかもしれません。

iPad など画面越しに分かった気になることが増えています。実物に触れること、ことに重さを実感する活動は、意識したいです。

道具わくわく

新しい道具は人をわくわくさせます。図工ではいろんな道具を使います。はさみ・のり・粘土べら・ローラー・カッター・のこぎり・金づち・彫刻刀・ペンチ・電動糸のこなどなど。十分に道具を試す練習時間を取り、たくさん

授業準備お手伝いします。ときどきワークショップしています。お問い合わせ tsuchiya_sat@mac.com

楽しみ、それから作品作りです。

たとえばカッターで鉛筆削り。うまくいった喜びは、できた自分が一番知っています。桜の小枝を拾い、そのまま校庭で「にせ鉛筆」を作りましょう。キリで穴を開けて、毛糸を通すと素敵です。毛糸の色を選ぶのも楽しいです。毛糸をどう結ぶかも学習ですね。

美しいものだらけ

私はカメラを手によく森に入ります。美しいもの探しが楽しいのです。一度しゃがむとなかなか立てません。小さな花の後ろにかわいい虫がいて、その下にはしなやかなキノコ。美しいものは、あちこちにあり、それはしゃがむだけで手を振ってくれます。

これは教室でも同じです。つぶやき、ささやき、まなざし、輝き、迷いながら文を書くときの鉛筆の動き、「あっ、いいこと思いついた！」、私が思ってもいないことを生み出す姿。

「正解にたどりつかせる」任務、マニュアルに従う運行に熱心だと、感動を見失ってしまうかもしれません。

粘土でやってみよう

粘土「とっても高い。とっても長い」

ねらい①粘土の素材（つながる・重い）に慣れる。楽しむ。

②協力する喜びを味わう

準備物：油粘土、粘土板、１ｍものさし

今日も感動したいなあ。今日はこれです。

「とってもたかい」

「このものさし使いますね。測ってほしい人は言ってくださいね。どうぞ」

「はかってください」

「○さん、33㎝」

ぐにゃぐにゃ曲がる。ブロック状を積み上げるなど工夫が始まる。２人組になる人が現れる。

「おっ、力を合わせるんですね」

ずるじゃないんだと顔を合わせる人。芯材も可。高学年の彫塑につながる。１ｍに届くと達成感。でも20分くらいで飽きが見られる。次に進む。

次に行きましょう。「とっても……」

みんな注目。「……ながい」です。どうぞ。

わっと始まる。机をくっつけて、２人、３人でやり始める。１ｍ以上はすぐ。

「10ｍは無理でしょうな」

とつぶやく。すると、「ゆかでやっていいですか」となる。もちろんどうぞ！　１年生で教室3周分。廊下にも出る。以上45分。

はだかから描く

描画「はだかから描く」

ねらい①身体の動きを表現する。

②身体の動きを楽しむ。

準備物：クレヨンまたは絵の具

八切画用紙

「身体の動きがよく分かるように、今日は裸を描きます。服があるとじゃまっけです。すっぽんぽんです。縄跳びならどんな感じ？　じゃあエア縄跳びしてみますか」

30秒で何回跳んだか。そしてモデルを募る。1名、みんなの前。

「大丈夫。裸にはなりません」

跳ぶ。みんな見る。膝と肘と首に注目させる。授業者が描いてみる。

胴体⬇お尻⬇ふとももふくらはぎ⬇足⬇肩から肘⬇肘から手⬇首⬇頭

順番は指示しない。

「まん中から描くと楽だよ」

とだけ。

頭から描くと、それ以外がおざなりになりがち。下書きせずに、ペールオレンジのクレヨンまたは鉛筆で描く。胴体から生えていくイメージ。

「えーと、ここが膝ね。ここが肘、ふむふむ。この手で縄を持つわけだ。このままだと寒いし恥ずかしいので服を着せましょう」

クレヨンならすぐに乗せる。絵の具なら乾いてから。顔の表情は最後、または描かない。ここまで10分。ではどうぞ。活動時間35分。

活動時間の確保のため、手順などは予め黒板に書いておきます。5時間目図工のときは給食時間に見せるとよいです。

こどもはすごい

図工は感動の時間です。どんな美しいもの・すごいもの・思いがけないものに出会えたか。いつかお聞きしたいです。楽しみにしています。

（大崎市・元教師）

いくつかの実践をSNSで発信しています。 https://www.facebook.com/satoshi.tsuchiya.714

わたしの出会った先生 36

面倒くさい人間

森　彩香

部活が全ての世界で

監督は神様、先輩は絶対。私はゴリゴリの体育会系である。部活が全ての世界で私は生きていた。

小学校から高校まで続けたソフトボール。朝練のために始発で高校へ通い、土日は遠征。今振り返れば、よくやっていたなと自分をほめたくなるときがある。試合の夢は今になっても見ることがある。当時は、寝ながらバットを振り、寝ながら大きな返事をしていたらしい。

高圧的に怒られる。そんなこと日常的。エラーをすれば「使えね〜な〜」と言われ、交代させられる。練習中、気の抜けたようなことをすれば「もう帰れ！」と強制帰宅を命じられた。しかし、この場合、帰ることは許されない。共感していただける方は多いと思う。「〇〇先輩は骨折していても試合に出ていた」「病院は監督にばれないようにいけ」などと先輩からの圧力も半端なかった。

そんな中であっても、監督は好きだったし、先輩も好きだった。教育と環境って本当に恐ろしい……。理不尽な世界の中で鍛えられた私は、都合のいい従順な人間でもあったと思う。それが良いと思っていたし、できない人は努力が足りないとも思っていた。

揺さぶられた大学時代

「体育会系めんどくさ……」とつぶやくゼミの先生。自分を否定されたような出会いからのスタートだった。失敗をして「ご心配おかけしました」と謝罪した私に、「心配はしていない。迷惑はかかったが……」とまっとうなご指摘をされたこともあった。

日々、論破されまくる私は、自分がどれだけ浅い考えで生きているかが良く分かったし、「あなたの考えは何か？　中立はありえないぞ」と迷える子羊にされることが何度もあった。この先生と付き合っていけたのは、ある意味、先生の嫌う体育会系で鍛えられた精神力のおかげだったのかもしれないが、都合のいい従順な人間ではいけないことを4年間で叩き込まれたように思う。

何事にも「はい」と言って返事をし、しんどくても精神力だけで何とかする。そんな生き方には限界がある。「しかたがない」と言って諦めることが大人になることではない。現在の私を支える大きな土台をいただいたような気がする。力のあるものに従うだけの人間だった私は、もっと自由に生きる術をいただいた。

「体育会系めんどくさ……」と言われたときのように、今度は、「従わないやつめんどくさ……」と思われるのだろう。何なら、体育会系の精神論だって、私には未だに根強く残っている。これでは本当に嫌われる「面倒くさい人間」に自分はなっているのかもしれない。ご心配ではなく、ご迷惑を掛けている方々には、この場を借りて謝罪するが、この「面倒くさい人間」にしてくれた、高校・大学の2人の恩師には本当に感謝している。これからは、こんな私でも許容してくれる大事な仲間たちを見習って、自分自身が「めんどくさ……」と思うような人との出会いや交友も大事にしなくてはと思っているところである。

（仙台市・教師）

瀬成田さんの共育実践力を次世代の教師たちへ

『震災を語り伝える若者たち』を読んで

千　葉　保　夫

宮城の「東日本大震災」に関する貴重な教育実践の本に、また１つ世界に発信したい本が出版された。この瀬成田さんの本である。

東日本大震災の津波で母と祖母を亡くした双子姉妹が、見知らぬ地（七ヶ浜）へ引き取られ向洋中に新１年生として転入学し「震災総合学習」を学ぶことになる。双子姉妹は「震災総合学習」で、高校生の相澤朱音さんや中学生の息子を亡くした丹野祐子さんらの語り部活動や転入先の同級生に触発され、封じ込めていた体験を綴り語り継ごうとする。その後「紙芝居」づくりにも挑戦する。「紙芝居」の絵・ストーリー構成などでは、母と祖母の死をどのように絵を描き表現したら伝えられるかを仲間と吟味する姿がある。その度に双子姉妹にはつらく悲しい思いがよみがえったことであろう。向洋中の生徒たちが、２人の被災体験のつらさや悲しさに触れないのではなく、その悲しさ・つらさに共振共有しながら共に共鳴し連帯したいと願い、母・祖母の死を共に悼み、未来を見つめ成長していく６年間の姿が、この本には丁寧に記録されている。

つらく悲しい被災体験と未知の地に転校した不安な双子姉妹が、自らの被災体験を語るということは、そのことを聞き取るやさしさと共感力のある生徒たちが周りにいるからこそ語れるのである。震災学習でこうした学びの集団を育てることができた貴重な実践例である。向洋中の学年・学校の教師集団の被災の現実・課題に寄り添い励まし続ける共育力のレベルは大きく高く稀有である。とりわけ、最初の「震災総合学習」案（２６時間）を支持した櫻井覚学校長の英断がなければこのような成果はなかったと思う。

私は３年間、学校での報告会・語り部集会などの取り組みを参観させていただき、双子姉妹から家族の死の悲しみと淋しさの中で生きるパワーと勇気をいただいた。震災学習の中で被災者が「綴り語る」のを待つことの大事さ、寄り添うことの喜び、自分の存在、生きる意味などを模索する人間としての学びの根源「いのち・死」を体感しながら成長していく中学生たちの姿は、感動的であった。

双子姉妹は、高校生になってからも、向洋中での学びを土台に新しい仲間と共に被災調査の聞き取りや「紙芝居」と語り部活動などを通してさらに成長していく。

未来を生き成長していく子どもたちには、国が定めた内容を「教え育てる（＝教育）」だけでなく、今、現実の社会で起こっている事実や出来事の課題から学習のテーマ・内容を自ら探し感じ考える「共育（＝共に感じ育ち考え行動する）」学習、つまり学力テストで測れない共育を通して中学生たちが自己実現できるようなカリキュラム開発と実践力の向上の創出こそが教師の本来の仕事であることをこの本は示唆している。震災体験を「綴り語り共有する」こと、「いのち・死」のこと、「津波被災教訓」のこと、「総合学習・後期中等教育」のことなど、この本の貴重な実践と提言にも触れたかったが字数が尽きた。

（元大学非常勤講師　宮教大・弘前大他）

待てよ！授業づくりの大転換
～ちょっと深く考えてみたい～

数見隆生

GIGAスクール構想については、つうしん104号、105号で2度特集しました。また、昨年10月に研究部で行ったGIGAスクール構想の進捗状況に関するアンケート調査結果を『研究年報・第2号』（本年5月発行）に掲載し、現場の状況や先生方の意識について報じてきました。

詳細は、それらに目を通して戴くとして、概要を述べると、昨年4月に突如タブレット端末が児童・生徒に配布され、GIGA スクール構想の意図説明や議論が学校で十分されないまま、一斉にICT教育が始まった様子が覗えました。タブレット活用の環境整備が不十分で、タブレット活用に教員格差も大きく存在する状況下での見切り発車でもありました。働き方改革が大きく問題視され、コロナ禍の慌ただしい学校に、唐突に導入され、実施に際しての子どもや保護者対応、校内協議や研修、慣れない授業準備等、一層忙殺されている状況が浮き彫りになりました。この教育のICT化は、戦後教育改革の中でも極めて大きな国を挙げての取り組みであり、学校の機能やあり方を変質させると共に、授業の質をも大転換させる可能性を抱かせるものです。

導入後1年に満たない時期の調査でしたが、県下の先生方はタブレットを使っての授業に賛否両論がありました。「より充実した学習になる」とした教員が約6割、「ほぼ変わらない」「これまでの学習が損なわれる」が約4割でしたが、一人の教員に良否両面を抱いている方も多くいました。有効性の評価では、タブレットのもつ情報検索機能を活用した調べ学習や視聴覚映像での認知のしやすさや比較・共有等、学習指導上の利便性、効率性が多く挙げられていました。「紙の資料や板書の煩雑さが解消できる」とか「自主学習できる」「まとめの発表が容易」「多様なコンテンツがある」「学びの成果や作品を保存できる」等もありました。こうした評価は、ネット上でのICT教育関連業界が謳っているメリット情報と似かよったものでした。

肯定的でない意見では、「ツールの一つに過ぎず、タブレットに振り回される」「学び合い学習が損なわれ、格差が広がる」「実体験的な学習が減少する」「書く活動や対面的な話し合い活動が減る」「デジタル教材を安易に使い、教師の教材研究や発問の工夫などによる追求的授業ができなくなる」等が出されていました。

さて、賛否が大きく割れ、良否両面あるとされるICT教育、しかも今後の学校教育の機能や学びの質に大きく影響するとされるGIGAスクール構想、今ちょっと立ち止まって、深く考えてみる必要があるように思われます。今回の特集では、そのことを提案しようと考えました。まずは、大きな意図性の視点から、授業の質に関わる観点まで、私の方からいくつか挙げておきたいと思います。

一、教育政策で、これからの情報・AI時代に生きる人間には不可欠と言うが本当か。「GIGA」の略字の発想とは誰の誰のための発想か？

二、教育や授業へのデジタルの持ち込みは、ツールとしての利便性はあったとしても、「人間を育てる」子どもの学びと教師の仕事を豊かにする本質機能に貢献するか。教師たちがこれまで真剣に創意工夫を懲らし、創出した授業原則・不易を消去してしまわないか？

三、文科省は、「令和の日本型教育」で「個別最適な学びと協働的学びの実現」と言っているが、今日の学力主義的状況下でのICT化では、「学びの孤立化」や「知の格差化」を一層増幅しないか？

こうした問題性について、みんなで話し合いたいものです。

（センター代表運営委員）

子どもとして生き、成長することのできる学校を

～子ども期を大切にできる教育～

鎌田克信

はじめに

学校の前を通ると、多くの校舎の壁面などに、「やさしく かしこく たくましく」などの「学校教育目標」が掲げられているのを目にします。最近では、学力向上の施策を受けてなのか、「かしこく やさしく たくましく」と、学力向上に関わる文言が筆頭に掲げられるようにもなっているのではないでしょうか。学校には、その教育活動に対して、効率性と経済性、将来の社会（経済）を支える力の育成、そして学力テスト結果をはじめとしたそれら教育活動の結果としての実証性（説明）を数字として求められる機会が増えています。

一方で、学校で子どもたちと共に過ごす教職員は、子どもたちの笑顔や集中した表情、ときにのびやかに校庭を駆け回る子どもたちの姿を大切にしながら子どもと共に授業をつくり、潤しい学校生活を生み出す努力を重ねています。この教職員の率直で、しかも学校教育の核心にある願いと努力は、外からの要求にかき乱され、見失われてしまうことがあるのかもしれません。私たちは大人を育てているのではなく、成長・発達しながら生きている子どもと共に学び、生活し、生きているのです。大人が考える将来の必要のために時間を費やすこと以上に、今この瞬間を子どもとして生き、子ども期を満喫することを保障することが大切なのではないでしょうか。

1　子どもたちの発達要求に応える授業と学校生活を

昨年、センターが実施した調査では、タブレットの利点として「便利」で「時短ができ」、「情報共有がしやすく」「子どもが関心を示す」上に「紙の節約にもなる」ことが挙げられていました。しかし、その利点は、子どもたちが人間として豊かに成長・発達していくことにどう関わっているのか慎重に考え、問い返しながら選択する必要があります。

「子どものからだと心・連絡会議」と「日本体育大学体育研究所」は、新型コロナウイルス感染症による全国一斉臨時休業の最中と休校明けに、子どもとその保護者を対象に「コロナ緊急調査」を実施しています。[1] 休校中の「子どもたちの困りごと」の上位3位は、「（思うように）外に出られないこと」「友達に会えないこと」「運動不足になってしまうこと」でした。これは、「友達と一緒に外に出て、からだいっぱいに動き、感動を共有しながら成長したい」という子どもたちの発達要求でもあります。ちなみに学習の心配は、5位でした。GIGAスクール構想による一人一台のタブレット端末による学習の推進は、子どもたちが教えてくれた上位3つの発達要求に応えるものになっているのでしょうか。「個別最適化」の流れは、子どもたちが仲間と共に育ち合いたいという願いと向

き合っているのでしょうか。

タブレットを手にした子どもたちが、進んでコンテンツを開き、操作していく姿。個々の子どもたちの進み具合やつまずきに合わせて練習問題に取り組み、計算したり覚えたりしていく姿。そういった学びが、子どもの成長・発達にとって、もっと言えば人格の形成にとってどのような意味があるのか、今一度考える必要があるのではないでしょうか。

『問い』に対して学級の中で考え合い、試し合いながら腑に落ちたときのわかり方と、一人黙々と調べ、問題を解き、自分に合わせた新たな問題に取り組んでいくときとで、子どもの中に育つものは同じなのでしょうか。自分が「できた・わかった」ときの感動、仲間が「できたとき・わかった」ときの喜び。これまで、学校では、そういったわかり方、でき方、そして感動の共有を教室で生み出してきたのではないでしょうか。タブレットに引き込まれているかのように見える子どもたちが求める発達への要求は、薄い箱の中では応えきれるものではありません。彼らが求める真の発達への要求にどう応えていくのか、子どもの成長・発達に伴走する私たちに問われています。時短と効率性に目を向けることは、『問いと答の間』にある豊かな世界と引き換えになってはいないか、近くに仲間がいるのに画面を見ながらデータを見せ合うことが、他者を感じ、共に生きる力を獲得する上でどのように有効なのか……子どもたちの息遣いを感じながら考えたいものです。

2　子どもの成長・発達を見守る眼差しをもち続けるために

前述の調査の自由記述回答にあったように、一人一台のタブレットは、図工や書写の「作品を撮影して記録し評価する」ことが容易になり、教師にとって便利な機器です。子どもにとっても、見てもらいたい部分を強調して提示できるという良さもあります。

しかし、私たちが教師として磨いてきた子どもの作品を見つめる眼差しは、写真や動画の記録と同じでしょうか。絵を描くとき、何度も消しゴムで消し、やっと引いた1本の線。けば立った画用紙を見つめると、その1本の線が愛おしく、大切な作品として私たちに迫ってきます。作文や感想文でも同じようなことがあります。いつも小さなか細い文字で書いていた子どもの文字が、大きく太くなっていたとき、そこにはその子の思いが込められています。いつも丁寧な文字で書いてくる子の文字が乱れていたとき、何かあったのかとその子にいつも以上に目配りをしようとする眼差しが生まれます。文字を見るとき、私たちはそこに子どもの姿と心のありようを見ているのです。実際、大学でオンライン授業を続けていた２０２０年、私は教師としての眼差しが薄れていくのを感じていました。そこで昨年度は、学生に2冊の日記帳をもたせ、書いてもらっていました。

使い方さえ覚えてしまえば、簡単に子どもたちから文字や数字を収集し、一覧やグラフに変換してくれるソフト（アプリ・コンテンツ）は便利さを提供してくれます。同時に、それらの機能は、私たちから子どもを見つめる眼差しを奪うことがあることを常に問う必要があります。どのようなときに使うのか、常に問い続けることが必要です。

3　知ることは、感じることの半分も重要ではない

私たちは人間であり、生き物です。直接ふれあい、からだまるごとで他者を感じ、自分を知り、世界を理解しながら、成長・発達していきます。

本やネットで昆虫についての知識を得ることと、実際に虫を手に取ることとは違います。夜明け前の林の中に分け入って虫を捕まえたときの高揚感、指先から伝わる昆虫の力強い動き、湿った腐葉土の香り、そしてそばにいた友達の興奮した表情。便利さ、効率のよさ、手軽さと引き換えに何を手放すのか、もう一度考える必要があります。

例えば、タブレットが一人一台あれば、理科の観察や生活科や社会科での見学記録が「効率的」で「楽になる」ことで、余裕が生まれるかもしれません。しかし、そこで行っているのは「撮影」であり、「観察」「見学記録」ではありません。理科の「雲の動き」の観察の際、カメラ機能で撮影すれば、作業終了です。教室に戻って写真を見ながら、気づきをカードに記入することでしょう。一方、これまでのように観察カードに空に浮かぶ雲を記録すれば、顔を上げる度に雲の形が変わっていくことに戸惑い始めます。ですから子どもたちは、空を見て雲の形を頭の中に記憶し、鉛筆を走らせます。頬に風を受けながら、雲が正面から頭の後ろにぬけるように動くのを感じながら気づきをメモしていきます。「先生、雲をかくのは大変、あっという間に形が変わっちゃう……」こういった気づきこそが大切なのです。写真は「撮影」（もしかしたらボタンをタップすること）であり、教室で行う気づきの記入は、目の前に広がる大きな空ではなく、小さな紙や画面の中の空を見て記録することが多くなることが想像されます。「便利さ」と引き換えに失っていくものに、教育のプロとしての教師には敏感さが求められているのです。

増山均氏の次の言葉は、便利さと引き換えるものを考えるときに示唆に富んでいます。「乳幼児は、母親や保育士の口元と表情を見て、相手の感情を読み取り、読み取った感情にのせて『ことば』とその意味を理解し、人間的なコミュニケーションの能力と社会性を獲得していきます。……年長の子どもたちは……肌のぬくもりを感じ、感情を共有しながら、『言葉』を使いこなし、人間理解を深めていきます。……若者は、腕を組み肩を組んで歌い、口角泡を飛ばして議論しながら自己を見つめ、他者への理解を深めます。高齢者と子どもは、年寄りが孫を膝に抱いて慈しみの想いを伝え、孫が年寄りの手を引いていたわり、愛しみの感情を覚えていくのです」[2]

まさに、レイチェル・カーソンが言うように「知ることは、感じることの半分も重要ではない」[3]のです。授業をつくる際には、どのように経験や失敗、試行錯誤の時間、そして「問いと答えとの間」を保障するのかを吟味することを大切にしたいものです。

4　文化の継承と再創造という観点を

遠くにいる人ともつながり、交流したり、話を聞いたりできること、ホワイトボード機能を使って考えを整理できること、たくさんの他者の書いたものやデータを一覧できること……一人一台の端末配備で、できそうなことがたくさん増えました。それらの利点を活用し、学びを深めていくことも一つの方法です。気がかりなのは、隣りに友だちがいるのに、「見せてほしいな」「教えて」と声を掛け、「なるほど」「ありがとう」「どうやったの？」……という関係を生み出す機会を捨ててタブレットを使うことになりはしないかということです。

私たち教師は、子どもたちと共に学びの世界をくぐりぬけながら成長していきます。教師は教材研究を深め、発問を吟味して子どもたちに投げかけます。その発問に触発された子どもたちは、自分自身や他者と対話したり、何かを試したり、確かめたりしながら真理を探究していきます。その姿に、私たちもまた子どもたちの可能性と教材研究では見出しえなかった新たな気づきと出会い、学びの奥深さに引き込まれていきます。教師と子ども、子どもと子ども、教室には縦横無尽に探究の糸が張り巡らされていき

ます。日常のすべての授業でそういうことが起きているのではないかもしれませんが、充実感を覚えた授業、楽しかった授業、心に残る授業では、このようなことが起きているのだと思います。先人が生み出し、継承されてきた文化に触れ、我がものとしていく過程で、私たちは子どもたちとともにそれらを再現していきます。そして、それは再創造の過程でもあります。同じ指導案、教材、教具を用いた授業でも、２度と同じ授業はできません。授業がもっている「一回性」に授業の醍醐味と魅力が満ちており、その分、難しさにもあふれているのです。

次々に開発されるタブレットの機能は、あたかも自分たちが何かすごいこと、すばらしいことをしているかのような陶酔感を生み出してはいないでしょうか。また、タブレットへのデータの入力や作品のアップロードは、常に衆目の中に自分の考えや作品を置くことになり、常時比較される対象にされかねないという点にも気を配る必要があります。ＳＮＳの普及の中で、子どもたちが常に他者の眼を気にしながらふるまうことに神経をすり減らしている状況を考えれば、似たようなリスクを考慮する必要があることが分かります。教師側から見れば、書き込みやアップロードされた作品は評価の対象となり、そこにばかり焦点が当てられ、目の前の子どもをみつめる眼差しを失わないような努力が必要です。

5　共に学ぶことで育つからだ

調査では、タブレット等のＩＣＴ教育の普及が子どもたちの心身の発達や健康に及ぼす影響について９割近くの教員がその影響を危惧していることが分かりました。「依存傾向」「視力や目の健康」「生活リズムの乱れや睡眠障害」「孤立化による心の問題」「運動不足」等、現在の子どもたちの健康問題がさらに深刻化していくのではないかという心配です。これは、子どもたちのからだと心の発達への危機感でもあります。

授業中の視線移動を考えてみましょう。これまで子どもたちは、授業の中で手元の教科書やノートに視線を落としたり、近くの友達と目を合わせたり、教師の話に耳を傾けながら黒板を見たり、時に窓の外に見える雲を眺めたりと、様々なものを見ていました。子どもたちは立体的に、感情を伴いながら様々なものを見ているのです。一方、タブレットに集中する子どもたちの視線移動は、かなり限定的になることは想像に難くありません。

機械的にプログラム化されていないリアルな授業の世界では、問いと向き合い、真理を共に追究する中で、友達や先生の思いがけない反応と出会いながら文化を獲得していきます。私たち教師もまた、子どもたちの反応に刺激され、豊かな学びの世界に足を踏み入れていきます。このようにして教室で生み出された学びは、私たちのからだに染み込むように獲得され、知恵となっていきます。学校で子どもたちは、同じ時と場、そして問いを共有しながら文化を獲得しています。子どもたちが欲しているのは情報や単なる知識ではなく、自分たちの生活や経験と結び付けながら共に世界をつかみ、働きかけていく知恵です。私たちのからだは、それらの知恵を刻み込んだからだであり、共に生きていく中でそれらをより確かなものにしながら人間として育っていくのです。からだこそいのちです。「からだを育てる」ことを教育の根底に据えた中森氏の言葉は、今なお光を放っています。

「（子どもの生命＝からだには）測り知れない人間の可能性が秘め

られている。その可能性に働きかけ、人間としての豊かな感情や知性やさまざまな能力やそして個性を開花させていくのが教育の仕事である。それは、別のいいかたをすれば、人間の価値の実現をはかるということである」[4]

学校で、子どもたちが人間としてまっすぐに発達することを保障されるよう、知恵を出し合うことが、いま、さらに求められているのです。

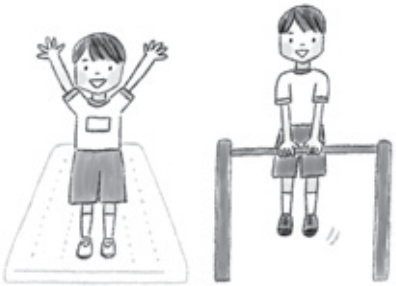
《引用・参考文献》
（1）野井真吾『子どもの〝からだと心〟クライシス「子ども時代の保障」に向けての提言』２０２１年かもがわ出版
（2）増山均『子どもの尊さと子ども期の保障コロナに向き合う知恵』２０２１年新日本出版社
（3）レイチェル・カーソン上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』１９９６年 新潮社
（4）中森孜郎『主体形成としての「からだ育て」』『双書・子どものからだⅡからだを育てる』１９８２年大修館書店

（東北福祉大学）

本当の「主体的・対話的で深い学び」

～岡崎実践に寄せて～

久保　健



1　はじめに

みやぎ教育文化研究センターの研究年報第2号の特集は「ＧＩＧＡスクール構想とどう向き合うか」です。この年報に「ＧＩＧＡスクール構想と向き合う」教育実践を載せようという話が出た時にヒラメイタのが、サークル（学校体育研究同志会）の全国研究大会に報告された岡崎太郎さんの「頭で立つ逆立ち」の実践でした。これは特にＧＩＧＡスクール構想を意識してのものではありませんでしたが、今回の年報の特集の趣旨にピッタリのものだと直観して、「これをもっと詳しく書いてほしい」とお願いしたのでした。

また、今回の『センターつうしん』には年報2号から鎌田克信さんの論稿が転載されています。この論稿は岡崎実践を読み解く上でとても参考になるように思われます。ですから、以下の岡崎実践に対する私のコメントは、鎌田さんの論稿と合わせて読んでいただきたいと思います。

2　「問い」と「答」の「間」

「問い」と「答」との「間」とは、大田堯さんの言葉[注1]で、私たちの仲間内で大切にされてきたものです。そこで、この観点で岡崎実践について考えてみたいと思います。ＧＩＧＡスクール構想の中で進められようとしているＩＣＴ機器を使った教育には、その

「間」がほとんどないように思われます。電子画面に文字や図や映像（音声も）が瞬時に映し出され、それを見たり聴いたり、意見をインプットして、整理したり議論したりする授業がサクサクとスマートに進んでいきます。しかしそこでは、子どもがいろいろなことを感じ、考え、仲間と交流しながら、思い悩んだり、行ったり来たりしながら「真理」（永遠に行き着くものではないのですが……）を探求する「間」が、一瞬のうちに通り過ぎられてしまってはいないでしょうか？

デジタル庁の２０２１年夏の全国アンケートでは、「体育の授業でタブレットをどう使っているか」について、「運動のやり方の動画を観る」「自分の動きをその場で撮って観て仲間と検討する」「データを作図する」等の回答がありました。それに対して、岡崎実践では、iPadで撮った映像を見たりもしていますが、基本的には子どもたちは生身の体で向かい合って逆立ちに挑んでいます。タブレットから得た情報と自分の目や耳で直接得た情報との間にも、また、それらとからだで感じとった情報との間にも少なくない断絶があり、それらを「翻訳」ないし「変換」する「間」が必要になります。岡崎さんと子どもたちは、その「間」でじっくり時間をかけて多くのこと・ものを学んでいるように思われます。

次に、言葉に表された「こと・もの」と目や耳やからだで感じとられたそれらとの「間」です。岡崎実践の中では、教師も子どもたちも、言葉とそれが表すイメージや身体感覚との「間」を行ったり来たりしています。確かに、言語は認識の概括であり、こと・ものの本質を捕まえる点では優れている側面があります。しかし反面、言葉になった途端にそこからこぼれ落ちてしまう感覚や認識の欠片もあります。さらには、手書きの文字がＩＣＴ機器でデジタル画面に変換された場合、文字や絵のかすれや消しゴムの消し跡などからも読み取れる情報がどうなるかという問題もあります。

この「間」は、「できる」と「わかる」の「間」だと言い換えることもできそうです。岡崎実践を読むと、逆立ちができずに悩んでいる子と、できているけどどうすればできるかが説明できない（わかっていない）子とのやりとり（言葉と示範、手振り身振りを交えた）が、目の前に生々しく浮かんできます。岡崎さんと子どもたちはこの点でも豊饒な時間をすごしています。

また次に、時間的・空間的な「間」です。岡崎実践では、かつて私たちのサークルで渋谷信賢さんや鎌田克信さんが実践した「秘伝書づくり」と同じような学習手法に子どもたちが「附中知恵袋」と名付けました。武道場の壁に、各自が「自分がうまくいかないで悩んでいる点」について投稿します。すると、同時進行で授業している全てのクラスの子どもがそれを目にして、面識もない誰かに「それはこうすればいい」とか「自分はこうやっている」と文字と絵で回答します。投稿した子どもは、「次の時間に返事が書かれていますように」と「神頼みする思い」で何日か過ごした後、次の時間に回答をみて、やってみてうまくいったら「マジで神～!!」と歓喜の声をあげます。（これは、私たちのサークルの矢部英寿さんのバレーボールの実践における、体育館の壁に張り出した模造紙の上での各クラスの子どもたちの紙上論議ともよく似ています）こうした「間」で学び・育つもの・ことも豊かなはずです。

個人的なことですが、岡崎実践のこのくだりを読んだ時、私は趣味の時代小説（遠藤寛子『算法少女』、宮部みゆき『ぼんくら・日暮らし・おまえさん』、沖方丁『天地明察』など）に出てくる「算額奉納」の場面を思い出しました。算学好きの人が「これは」と思う難問を「算額」（絵馬）として神社に奉納します。すると、それを見た別の算学好きが、それに対する自分の解答を記した額を掲げ、おまけに自分からさらなる難問を「どうだ～」とばかりに掲げます……そんな和算の世界の場面ですが、こうして江戸時代の和算は世界でも最高水準になったのだと思うのです。

さらに、教師と子どもの「間」、仲間との「間」です。教師も子どもたちも、体のサイズや機能、感覚する能力や理解し分析する能力、おしゃべりと寡黙、こと・ものに対する積極性と消極性など、さまざまに異なった個性的存在です。ですから、ある子どもには「そうやったらうまくいった」というやり方やアドバイスが、他の子どもにもそのまま当てはまるわけにはいきません。ある意味では、他者と完全にわかり合うことは絶望的なまでに難しいのです。それでも私たちは、異質協同学習をよしとして「エンヤコーラ今夜も船を」出すのです。子どもたちが、互いの違いを自覚しつつ、その違いの彼岸にある「技術と認識」にアプローチするための「間」がこの実践にはふんだんにあるのです。そして、この「間」があるからこそ、子どもたちの学びは、逆立ちができるための共通の技術（法則性）と異なった子どもによるその個性的な解決とを複眼で見つめる（学習指導要領を超えた）「主体的、対話的で、深い学び」となっているのです。

3 「個」を重ね合わせた授業と「まとめの指導」

私はかつて、サークルの矢部智江子さんの鉄棒の実践を例に「まとめの指導」について述べたことがあります。[注2] そこでは、2年生の子どもたちが鉄棒「こうもりふりとび」の学び合い学習を行いました。この授業で到達した子どもたちの「こうもりふりとび」のできぐあいもわかりぐあいもとても個性的でした。矢部さんは、そうした授業のまとめを、保護者を招いての「発表会」という形で行いました。それは、授業で子どもたちが学んできた過程を幾つかの段階（場面）に分けて、①ナレーション ②実演 ③その時に感じたこと・思ったことの作文で振り返るものでした。重要なのは、この発表会のシナリオを子どもたちと作り上げる中で何がなされたかです。そこでは、各々の場面に誰の実演と誰の作文をあてるのかが問題になります。上手くできる子が実演するのか、苦労した子が実演するのか？ 怖かったという作文を読むのか、できてうれしかったという作文を読むのか……こうした中で子どもたちは、この授業で学んできたすべての場面でのすべての友だちの実技の様子や交わした会話、書いた作文などを振り返ることになるのです。

岡崎実践でも同様で、この授業で子どもたちが到達した「さかだち」ができるための法則は、公約数や公倍数のような共通性としてではなく、一人ひとりの子どもたちの個性的なできぐあいやわかりぐあいを重ね合わせた上に浮かび上がってくるような性質のものです。であるならば、そうした授業の「まとめの指導」もまた、スッキリと要約され定式化された形でではなくて、「個を重ね合わせた」形で、つまり、子どもが30人いれば30人分の悪戦苦闘があり、

鉄棒発表会プログラム

(1)はじめのことば
(2)こうもりふりとびができるまで（実演と作文）
①むずかしそうだなあ
②ぶたのまるやき、やればできる
③手と頭をいっしょにふればいい
④とばすかんじがたいせつなんだ
⑤こわかったけどはじめてとんだ
⑥はじめてとんでうれしかった
⑦足を前に出そう、でもむずかしい
⑧クラスのみんながとべた日
⑨はん長としてひっしで教える
⑩手をつかないでとぶ三つのポイント
⑪こうやってあげたら、うまくなった
⑫こうえんでもれんしゅうした
⑬はん長としてのやさしい気もち
⑭はじめてぴっと立った
⑮グループのまとまりナンバー1
(3)こうもりふりとび―全員のえんぎ
①グループごとに、一人ずつとぶ
②すきな友だちとくんでいっしょにとぶ
(4)おうちのかたの感想
(5)先生のお話
(6)おわりのことば

30通りのできぐあいやわかりぐあいがあったわけですから、それらをみんなで振り返る中から、「そうだったよなぁ」と共感したり納得したりできる重要な体験や会話、エピソードなどにアクセントをつけて、それらを最大限漏らさずに重ね合わせてみんなが引き取る。そんな形でクラスの全員分の学んだものを全員が我がものとする。そんな「まとめの指導」ができたらステキだったなと思うのです。

（注1）『教育』1965年10月号

（注2）久保健、他『「問いの系統性」による体育授業の実践的研究Ⅰ』『体育科教育学研究』第13巻1号、1996

（センター研究部長）

米づくりから考えてきたこと

小野寺　勝　徳

はじめに

私は、今年度で小学校の教員になり40年目になる。そのうち、半分以上の年数を学校での米づくりに取り組んできた。

私の勉強の出発点は、『逃げる民』（鎌田慧）を読んだことがきっかけである。出稼ぎの農民が、都会の現場で亡くなったり、行方不明になったりしていた。その人々の足跡を追ったルポルタージュで、それを読んだときに、他人事に思えなかった。自分の家も兼業農家であり、8反5畝（約85ａ）の水田を耕作する農業とともに、祖父の代から「桶職人」として働くことで生計を立てていた。父も桶職人であったが、「高度経済成長」とともに化学・工業製品の普及が始まり、桶の需要は減り始めていたため、タイルを貼る技術を身に付け、浴室やトイレなどの工事を扱うことによって、出稼ぎをしないで地元で生計を維持することができた。

一方、米中心で生計を維持していた近隣の専業農家は、『減反』の始まりとともに、米価は上がらなくなり、そのままの経営面積では生計を維持できなくなってきていた。しかし、それは農家がさぼっていたからそうなったのではない。朝から晩まで重労働を重ね、さらに機械化を進めるために「兼業収入」をつぎ込んでまで、「家産」としての水田を維持し続けてきたのである。

「農業問題」というのは、農家が作り出した問題ではなく、資本主義経済発展の中での、農業と工業（企業）の発展の違いの問題であることに気付いてからは、歴史学、経済学、社会学等を学ぶことの重要性を実感させられた。

学習を進める中で、今の農業、農家の現状をよくするためには、「農政」がよくならなければならないと思った。しかし、授業の中で、「農政」を分析してみたところで、子どもは関心を持たず、理解もなかなか深まらなかった。低学年を担任したときには、「農業」の何を学習したらよいのかも分からない状態だった。かろうじて2年生の社会科で「農家の仕事」を扱う単元があったけれども、そこでは農政についてはほとんどふれることはなかった。

1　小学校での米づくり

下の3枚の写真は、小学校の子どもたちが植えた稲と専業農家の方が育てた稲を並べて比べたときのものである。品種は、写真1と3が「ひとめぼれ」で、写真2は「みやこがねもち」である。稲刈りの前後に、稲の違いと、どちらの稲が自分たちで育てた稲かを考えていた。そうすると、ほとんどの子どもたちは、根に土がたくさん付いていて茎も太くて数も多く籾の数も多い左側の稲が専業農家の方が育てた稲で、自分たちのは右側の方だと答えていた。それは、自分たちは初めて米づくりをしたのだけれども、専業農家の方は毎年米づくりをしているから、よい稲を育てることができたという理由だった。しかし、実際は、3枚の写真全て左側が子どもたちが植えて育てた稲である。普通に考えるとそんなことはないと思ってしまう。ほとんどの子どもたちは、「えっ。なんで。」と疑問を持つ。中には、稲刈りで稲を十分さわっていたにもかかわらず、自分たちの刈っていた稲と違う方を選んでしまう。

違いは、栽植密度である。左側は子どもたちの手植えで1株に1本だけ植え、株と株の間は30㎝（疎植：写真4）。それに対して、右側は田植え機械で植えたもので、1株に3～5本ずつ植えられて、株と株の間は横25㎝、縦15㎝の間隔になっている（密植：写真5）。ではなぜそのようなことが起こるのだろうか。

稲は、1粒の籾から芽を出し、「分けつ」（茎を増やす）して100本になり、10000粒まで籾を増やす力を持っている（写真6）。本数が少なく間隔も開いている（疎植）と葉を横に広げて分けつしていくので、日光を受ける体勢もよくなる。さらに、根もよく伸びるので、茎も太くて倒れにくくなる。しかし、密植の場合は、稲の葉同士が交錯して日かげを作ってしまうため、光合成の効率がよくない。また競争しあって伸びるため、茎自体は細くなり、草丈が85㎝以上になると倒れやすくなるとも言われている。（栽植密度の違いは写真7、8、9参照）

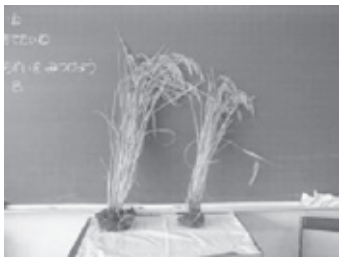


写真1　1998年の稲：小牛田小

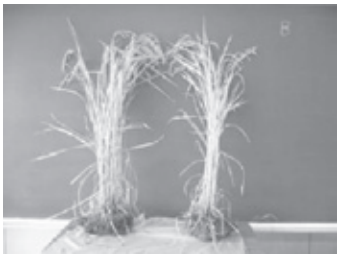


写真2　2008年の稲：松山小

写真3　2012年の稲：鹿島台小

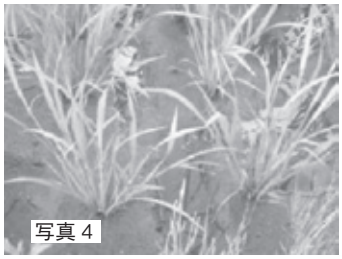


写真4

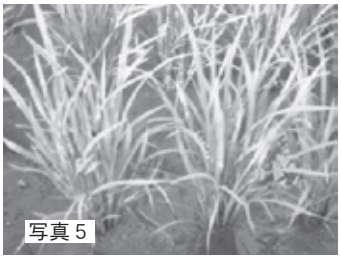


写真5

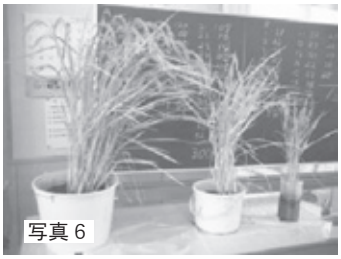


写真6

1993年の大冷害のときには、一般の水田で1反（約10a）当たり3俵半（210kg）しかとれなかった水田が多かったが、1本植の水田では8俵半（510kg）もとれていたそうだ。同じ品種の稲であっても、人間がどのように育てるかによって、稲が発揮する能力は異なるようだ。

これまで何回か子どもたちと一緒に米づくりを進めてくる中で、稲を育てるためには、本当の意味で「総合的な力」が必要なのではないかと思うようになってきた。稲の生理をよく理解すること

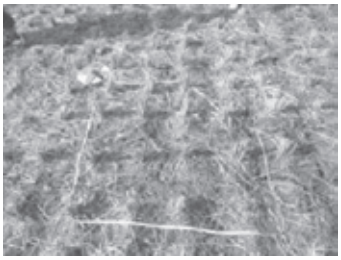


写真7　2011年松山小：1㎡ 16株

写真8　2011年松山小 1㎡ 24株

写真9　2006年7月

から始まり、天候、気温、温度管理、土づくり、施肥や農薬の使用（量や時期）、水の加減、栽植密度、作業技術、水路の管理、販売等を一人の農民がすべて自分で判断し、作業しているのは、まさに「総合」そのものだと思った。

2　「1本植の稲との出会い」

私が初めて疎植の稲を見たのは1980年だった。宮城教育大学の安孫子麟先生に「疎植」の水田を見せていただいた。その稲はササニシキだった。自分の家の水田の稲との違いに驚いた。早速、父親に話してやってみようとしたのだが、「今までいろいろやってきた。その結果、今やっている機械植が一番いいのだ。今さら手植えで1本しか植えないのは、やる意味がない。」と言われた。そこで、「田植機で植えられない所だけでもいいから……。」とねばったところ、「排水路側の人が通らない所だったら……」と言われた。田植えの後、「すまっこ」（端の角の部分）に弱々しい苗を1株に1本ずつ数株だけ植えた。その年、「社会科総合実習」の授業で、私が植えた1本植の田んぼを、疎植の研究を続けてこられた本田強先生や安孫子先生にも見ていただいた。さらに機械植の稲との違いを隣の田んぼの持ち主の方に認められ、父親も態度が変化し、「すまっこ疎植」を続けていた。

また、卒業論文の調査で南郷農協を訪れたとき、当時の農産課長さんに、『猫の目農政』って知っているか？　猫の目のようにくるくる変わるという意味だけれども、それだけでは半分しか分かったことにならないんだよ。農家を減らすという点では一貫しているんだ。その方法がくるくる変わっているだけなんだ。」と教えていただいた。

その後、農業をやめさせ、農家を減らすことが目的ならば、農業をやめず、農家・農民を減らさないようにするために何ができるかを考えることの方が大切なのではないかと思い始めた。つまり、「日本の食糧自給率を上げる」ことだけが大切なのではなく、「一人ひとりの自給力と持久力をつければいいのではないか」と考え始めた。

さらに、宮城教育大学の公開講座で「合鴨農法」の田んぼを見学した。田んぼに合鴨を放して除草する農法だ。「稲を食べられることもあるが、田んぼに行く楽しみがある。」と農家の方は話していた。1枚の田んぼで、「疎植と合鴨ができたら……。」と思い始めた。また「農政」を批判するだけでは稲作農業はよくならないとも考え始めていた。

「1本植と合鴨」、合鴨たちは機械植の「密植」だと稲の間を通れなくなるが、疎植であれば「縦横無尽」に田んぼの中を泳ぎ、歩きまわり、子どもたちも田んぼや稲に興味を持つのではないかと思った。

そして、1995年4月、1年生を担任することになり、保護者の中に、学校の近くにちょうどいい広さの田んぼを所有しており、雑誌「現代農業」を購読していて、疎植や合鴨農法についても理解を示してくださる方がいた。そこで、初めて、「1本植と合鴨」による米づくりが始まった。

■ 農業と工業のちがい

農　　業	工　　業
エネルギー源は、太陽（自然）。	エネルギー源は、電気（人工）。
酸素を作る。	二酸化炭素を出す。
手で作業することが基本。	機械を使うことが多い。
自然にも関係しているものも作り出す。	人のための物を作り出す。
自立してできる。	人に雇われることが多い。
人が住める環境を作る。	人が住めない環境になることもある。
何もないところからでも始められる。	道具がないと作る事が出来ない。
健康にプラスになるものを作る。	健康に害になることもある。
生き物を育てる。	動物が住みにくい環境になる。
自分のタイミングでできる。	他人の指示で動くことが多い。
好きなものを育てる。	好きな物を作れない。
人がいなくても育つ場合がある。	人がやらないと何も作れない。
食料を増やす。	食べ物を減らす（廃棄する部分）。
資格とかがなくても始めやすい。	資格とかが必要な場合が多い。
子どもから年をとった人でもできる。	若い人や体力がないとできない。

3　「農業」とは

米づくりの学習をしてきた6年生と農業と工業の違いを考えた。これまでの米づくりだけでなく、酪農の学習も取り入れた。放牧されている乳牛と牛舎で飼われている乳牛の乳量を比較し、そこから「農業」とは何かを考える授業をした。

「農業は、生き物の持っている能力を最大限発揮させてものを増やす産業である。そのために環境を整えるのが人間の仕事である」「工業では、加工はできるけれど、物を増やすことはできない。もともと本質的にちがう物事を同じ基準で考えるとまちがった結論になってしまう。」と前出の安孫子先生に教えていただいた。農業は、「能業」であり、「脳業」でもある。しかし、「納業」や「悩業」、さらには「NO業」のような扱いをされている面もある。また、「生き物」を人に置き換えるとそれは「教育」になるとも言える。

終わりに

「学力向上」が「学力工場」化したり、「デジタル・ICT・タブレットPC」などの「教育機器」が「教育危機」を解決するかのように言われたりしている。しかし、だれかが作った画像、映像、作品、文書はその人の判断・主観が入っており、「現状・現実」の全てではない。そこに「選択」があり「捨てられた部分」がある。それを見失わず、「全てを観る」ことで分かること、感じとることをこれからも大事にしていきたい。

（大崎市・教師）

読者の声

「子どもの生きづらさと今」（つうしん106号）というテーマでの特集は、とても良かったと思いました。コロナ禍、ロシアのウクライナ侵略など世界的に深刻な問題がある中、日本の教育現場においては、大変苦しい状況にあります。私は教職を離れましたが、常に劣悪な環境の中にあるからこそ、「学び」の大切さを感じています。そして、ひとりの市民として、人権・平和に関する問題に「わがこと」として向き合うべきだと考えています。

先日、新聞紙上で（朝日・朝刊4/27）、震災死した県内の高校生について行政は調査を実施すべきだという達郎先生の発信された記事を読みました。本当に県は責任をもって行ってほしいと思います（特別支援学校の高等部及び高等支援学校の方も調べていくべきです）。そうしてこそ、次の世代に震災の実相を伝え重要な歴史資料となると言えます。こうした震災をめぐる現実的な課題について、今後センターつうしんで扱って頂ければと期待しております。　（小野寺修子さん）

大地震後の困難な状況のなかでの106号、ありがとうございました。

新学期の始まる今、今回もタイムリーな企画だったと思います。

長男が小学校の教員をしているのですが、たまに会うと、生きづらさを抱えている子ども達の話をよく聞きます。いつも悩みは尽きないようです。「つうしん」は、そんな悩める教師の支えになっていると思います。

「子どもの風景」と「作品について」は、作者の息づかいやクラスの情景、教師のあたたかい眼差しが感じられ、毎回楽しみにしています。

保育園の子ども達も、おやつに出される「あげパン」が大好きでした。

（町田文子さん）

数見先生の論文、子ども・保護者から見た学校に寄稿された方々の論文、このいずれの論文の多くの箇所に共感する部分がありました。

私自身も自分が受けた小・中・高の教育のあり方に疑問を持ちながら、でも周囲のいろんな人々に助けられ、今まで生きてきました。

“人間に必要なのは、信頼と共感を得る親や仲間との関係性です。そこが安定していれば自己肯定感や自立と共生の力が育まれます。”ここを身近なところから具体化していくことが必要なのだと思います。それに気付いた者が行動することが、一人ではできないから仲間をつくって、私の周囲にも30代、50代の子ども、孫に「育ちそびれ」をかかえている人がいます。106号をテキストにして読み合わせをしたいと思います。

（北村裕子さん）

manacoと2年間

中野柊一郎

manacoとは

manacoは「宮城県の子どもたちが明日に希望をもてる社会」をつくることを目指す団体です。教師や教育、子どもにかかわる仕事を志すなど教員免許を取得予定の若者が中心となって、宮城県内の不安や悩みを抱えたり、やりたいことがあるがなかなかできない小中高生の居場所づくりを行っています。

主な活動内容としては、①オンラインでの居場所づくり、②イベントの実施を行っています。オンラインでの居場所づくりは、お子さん1人に対して、スタッフ1名が担当者となり、個別の活動を継続的に行います。活動内容はお子さんのニーズに合わせながら、決めています。自分のわからないところや学校の宿題を楽しく勉強したり、趣味や近況を話したり、恋バナをしたり、一緒にゲームをしたりと活動内容は人それぞれです。平均的には週1回、45分～1時間30分の活動です。スケジュールもお子さんやご家庭と担当スタッフで調整します。

イベントの実施は利用者の子どもたちが興味関心をもっていることをスタッフと一緒に楽しく行っています。海辺でゴミ拾いをしたり、体育館で一緒に体を動かしたり、外で虫を捕まえたり、ゲームプログラマーの話を聞いたりなどを行ってきました。

manacoを設立したのは2020年の5月です。新型コロナウイルスの感染が拡大する中、学習の遅れや交流の減少など不安や悩みを抱える子どもたちの力になりたいと、当時、宮城教育大学の4年生で、現在共同代表を務める岡崎・中野が団体を立ち上げました。活動を行う中で、寄り添いを求める子どもたちに出会い、新型コロナウイルスに関係なく、活動を継続していくことを決意しました。今回は約2年間の活動で感じたことを伝えたいと思います。

教師や教育関係、子どもとかかわる仕事を志望する大学生・若者の交流の必要性

私が活動を始めてから感じたことは「教師や教育関係、子どもとかかわる仕事を志望する大学生・若者の交流の少なさ」です。manacoは2年間、多くの方に支えられてきました。子どもたちのために様々な企画にお力をお貸しくださる方、大学生に対していろいろなお話をしてくださる方、活動に対してフィードバックをくださる方、会議室や研修会場を貸してくださる方、いろいろな方を紹介してくださる方などたくさんの方々のおかげで、今のmanacoと私たちがあります。感謝の気持ちでいっぱいです。

その一方で、私は活動を始めるまでこういった方々にお会いできていなかったのかと思うと、とても恐怖を覚えました。月並みな表現になってしまいますが、様々な方との出会いを通して子どもたちに伝えることができることが増えた私にとって、この出会いは宝物です。大学では素敵な先生方から多くのことを学びましたが、実際の学校現場の方や教育関係者、子どもたちの未来を考える素敵な方々との繋がりは自分でつくりに行くことも必要であり、また、そういった場をつくる人も必要です。

教師や教育関係、子どもとかかわる仕事を志望する大学生・若者が同じような思いをもった同世代と出会い、交わることができる。ロールモデルとなる先輩と出会い、交わることができる。全く教育とは関係ない面白い大人と出会い、交わることができる。私は今、そういった場をつくりたいと思っています。これまで私が出会い、お世話になってきた方々との縁を総動員させ、未来に貢献していきたい。どんな形でも構わないので、是非皆様のお力をお借りできたらうれしいです。Facebook「中野柊一郎」やメール（manaco0510@gmail.com）でも気軽にご連絡ください。

（manaco共同代表）

新しい「学校」を求めて

八巻寛治

不登校や不安傾向の強い児童が、明日また来たくなる学校へ

令和5年4月、仙台市太白区の坪沼地区に我々ろりぽっぷ学園が新しい学校をつくる。

不登校の児童や不安傾向の強い児童を対象にしたろりぽっぷ小学校だ。

学校のモットーは「明日また来たくなる学校」である。そのように考えた理由は、仙台市も宮城県も相変わらず減らない不登校の児童や新型コロナウイルスによる不安などから登校できない児童に新たな学びの機会を提供できないか、社会貢献できないかと考えたからである。

現在の学校で気になることは、例えば学習に躓いたときに、分かるまで何度も繰り返して取り組んだり、前に戻ってじっくり学び直しをしたりすることができないことで、学習に対しての抵抗感や苦手意識を感じてしまう児童がいることである。

また、人間関係においても、同級生と上手にかかわることが出来ずに孤立してしまったり、対人関係で同調圧力やピアプレッシャーを感じたりする児童がいることもある。

家庭内に不登校の児童が出ると、保護者自身が困惑するだけでなく、助けを求めるにも、誰にどのように相談し、解決・解消したらよいか悩んでしまうことになる。

そこで、不登校や不安や悩みが強い児童が学習への抵抗、人間関係の抵抗を減らす新たな学びが必要だと考えている。

更に、保護者の不安や悩みに寄り添ったり、解消できるようなったりすることも同時に実施することで親子関係も改善できるのではないかと考えている。

『幼児教育』＋『イエナプラン教育』＋『保護者支援プログラム』

ろりぽっぷ学園は仙台市内に認定こども園や保育園、小規模保育園、学童保育など7施設約550人、スタッフ150人を抱える学園であり、幼児教育では自由保育、体験型保育、ゾーン保育等の先駆けとしても知られている。

いま、混迷を極めている日本の教育情況の中で、「ろりぽっぷプラン（学びの多様性・学びのコミュニティ）」を基礎とした、人間が生まれ持っている「自ら学ぼうとする力」を活かす新しい小学校を計画中である。

『幼児教育』＋『イエナプラン教育』を基にろりぽっぷ学園が行う幼児教育「体験活動から学びへ」、そして、オランダで取り組まれている「イエナプラン」のコンセプトの活用。学習内容を「自己選択・自己決定・自己対応」できるように配慮し、興味・関心のある学習内容から活用し、得意とする学び方で学ぶ場を設定する。さらに同調圧力を感じ難くするため、異年齢グループなども活用する。

『人間・キャリア科』の新設

不登校児童のコミュニケーション能力の向上を図ることを目的とした心理教育やカウンセリングスキルの活用を促進し、人間関係づくりを学ぶ。また、保護者も交えての授業も計画したり保護者の支援も行っていく。

『様々な人との交流活動・様々なことの体験』

人々との触れ合いを通して、人間としての良さの体験を実感する場面・機会を多く設ける。さらに、動植物とのふれあい体験や校内や地域の素材を生かした体験活動を取り入れる。

個別最適な学びを目指し、自分で自分の学びを調整し、自分の学びの目的やペースを自分で試行錯誤しながら見定めること。

子どもたちの特性を踏まえた個別最適な学びは、多様な他者との共同的な学びの循環などを通して一体的に充実することが必要であり、そのような場を本学園では大事にしたい。

（ろりぽっぷ学園カウンセラー）

おすすめ映画

『ドライブ・マイ・カー』の二人に注目してみた　2021年

加藤　修二

アカデミー賞ノミネートのおかげ。半年前の封切作品をなんと県南の小さな町・大河原で、観ることができました。まぁ、客席には12人もいてねぇ。『パラサイト　半地下の家族』みたいに作品賞獲れないかなぁって観ちゃいました。

映画は、広島での国際演劇祭に演出家として招かれた家福（西島秀俊）がチェーホフの戯曲『ワーニャ伯父さん』を作り上げるまでの話です。日本語に、中国語、韓国語、手話と多様な言語が交差する映画中演劇とはまるっきり逆みたいな、感情を極力排した「テキスト読み」の稽古の様子が淡々と撮られていきます。そこには家福の妻、音（霧島れいか）と関係を持っていた若い俳優の高槻（岡田将生）が存在感を示していました。家福は嫉妬の闇に沈むのです。どこかで観た映画の感じです。でもそうなりません。家福が、亡くした妻、音に繋がる傷や後悔を若い専属運転手のみさき（三浦透子）へ晒す過程が、2人のドライブの中に描かれるからです。世代も立場も違う女性と向き合う男性を西島秀俊は男ぶりを言わないで好演していました。そしてそういう家福だから、寡黙でタバコが相棒のみさきも心を開くのでした。

これまで映画やテレビで語られてないような2人を丁寧に描いた『ドライブ・マイ・カー』。カメラワークも言うことなし。アカデミー賞の作品賞を獲れなかったのが不思議です。

（元教員）

読書のすすめ（第8回）

久保　健

『民主主義の育て方―現代の理論としての戦後教育学』

神代健彦 編著　かもがわ出版　2021年

本書は、その副題に「現代の理論としての戦後教育学」とあるように、戦後日本で平和・人権・民主主義という３つの理念に基づく人間形成をめざした「戦後教育学」が、昨今、「硬直的な近代主義教育学」「古くさい左翼教育学」などとみなされる風潮がある中で、これを「混乱と困難を極める現代の教育の現実を深く考え、未来への展望を語」るために必要な（教育の「そもそも」の）理論として読み直す目的で書かれたものである。

そこでは、第１部：「公」教育の理論では、国民の教育権、私事の組織化、地域と教育、公害教育、青年期教育をめぐる５つの論が、第２部：価値論の復権では、発達、教育的価値、民主教育、障害児教育をめぐる４つの論が展開されている。

私は学生時代に体育・スポーツ史を学び、その後それを教える（体育教育）学にシフトチェンジしてきた。そのため教育学は全く独学で、矢川徳光、城丸章夫、勝田守一、中内敏夫、大田堯、坂元忠芳ほか、本書で取り上げられている「戦後教育学」を読みあさって自分の教育論を模索してきた。

その私にとって、本書は、自分の教育についての考え方が「硬直的」で「古くさく」なっていないかどうかを点検し、「未来への展望」を語れるものに鍛え直す上で貴重な示唆を与えてくれる。それは、「ベルリンの壁」崩壊以降の世代の教師や教育を考え・論じる人たちにとっても同様であるに違いない。

相談センター報告
（第27回）

相談員１年目を振り返って

みやぎ教育相談センター相談員　内記　英明

相談員になって1年が経過しましたが、本来なら週2日勤務のところコロナ禍による感染防止のために週1日勤務となり、半分の経験しかしていません。そうした中で受けた相談事例を紹介しながら感じたことを記してみたいと思います。

相談者（当事者）は大きく2つに分類できます。1つ目は、大人たち自身の相談電話です。これが毎日のようにあるケースもあります。これは予期していなかったことでした。

例えば、親の子どもへの接し方を見ていて、自分はこんなふうに感じた。あなたはどう思いますか。というような内容で、自分が見たことや考えたことを相談員に伝え、何か感想なり意見を求めるのです。それによって自分の何かを確認したいという欲求でしょうか？　本音で話せる姉弟とか友人とかが周りにいないのでセンターがその代役を果たしているわけです。このようなことで定期的に「相談電話」があります。

また、教員をしている兄が職場でいじめにあっている。兄は自分が力量不足なのだから仕方ないと泣きながら話し、周りにも迷惑をかけることになるので辞めたくないという。このままでは兄がだめになってしまうので辞めさせたいが、どうしたらいいか？　というような本当に切迫した相談もありました。

2つ目は、当センターが主眼としている子ども、児童・生徒の学校生活や家庭生活にかかわる様々な問題について親や家族、教員からの相談です。その相談内容の大多数は不登校問題ですが、対応は個々の原因や事情によって、それぞれに対応した対処をすることになります。

例えば、中学2年生。4月ごろから時々学校を休むようになり、6月からは学校に拒否反応を示すようになった。毎日、家の中でテレビゲームばかりしているのでいらいらしてしまう。医者からは起立性調節障害と診断されている。父親は4月から単身赴任で普段は家にいないので相談する相手がいない。

また別な事例では、中学1年生になってからめまいがひどくなって学校を休むようになったので、近所のクリニックで診てもらったら起立性調節障害と診断された。医者からは時期がくれば治るので無理せずに本人が出校できる範囲で、登校するようにと指導された。学級担任も事情を理解してくれて課題等も準備してくれ対応してくれている。しかし、自宅が学校の近くで子どもたちが毎日元気に登校する姿を見ると、高校受験のことなども頭をかすめてきて、これで良いのかと焦る。義父が同居しているので学校を休んでいる孫の姿を見て怪訝そうな顔をしている。するとますます焦ってしまう自分がいる。

他にも、いじめが切っかけとなって不登校になってしまった事例等もありました。

私ひとりだけではどうにもならない相談も多くあります。その場合にはセンター内で相談したり、外部の関係機関と連携しながら解決の方策を考え、対処していくことになります。しかし、なかなか簡単にすっきりと解決することが難しいことばかりです。

今年度の相談業務が始まっていますが、初心者の私としては、相談員の心構えとして一般によく言われる「話し上手より聞き上手になる」、「話しを聞き、主訴をつかむように努める」、「ともに考え、ともに歩む」を心に刻みながら1年間頑張ろうと思ってスタートした2年目です。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL ０２２―２７２―４１５２

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき10時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間，休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

ひと言

三つの〝nation〟と平和

本田　伊克（センター運営委員）

国家(nation)とは「想像の共同体」である。ベネディクト・アンダーソンはそう指摘した。社会の近代化が進む過程で、人間はかつてないほどの広い領域を統治する国家を作り出していく。互いを直接見知ることのできぬほど広域に及ぶ圏域を統治するためには、起源、言語、文化、価値を等しく共有している者同士であるという国民(nation)としての意識を創出し、維持し、高揚させる必要があった。同じ「ルーツ」をもつ者同士であるという意識によって結ばれた想像の共同体はしかし、その内外に、自分たちとは「異なる」者を見出し続け、敵視し排撃することにもなる。地勢図を軍事力によって塗り替えようとする国も、これに対抗する国も、それぞれの民族(nation)の歴史的起源を強調する。近代国家が生まれたことにより、戦争が必然的に生じると言いたいわけでは決してない。だが、平和を希求する私たちは、国家を、3つの〝nation〟との関わりで改めて問い直す課題を突き付けられているのではないか。

子どもの風景「作品について」……堀籠　智加枝（宮城作文の会）

今を綴る、「子どもの世界」を生きる

本を読むことが大好きな子どもたち。人気の「名前占い」の本を図書館から借りて、何人かで丸くなって見ていました。そんなときに、「『ち』だから、先生のも調べよう」と思った2人。そして「モテ期」を見付けて、私のところまで「ほら見て！」と言わんばかりに見せに来てくれました。「先生、これ当たってる？」「モテ期19だけど、すぎてるよ。」と、とっても真剣な顔で。占いが当たっているかどうか、子どもたちにはとっても重要なのです。かわいいです。

それで終わりかと思いきや、「昔、がんばり屋だった？」と、「昔＝子どものとき」を付けて、聞いてくる子どもらしさに、思わず吹き出しそうになりました。

みんなで読み合うと「自分も蒼君に探してもらって分かって良かった。」「私は、モテ期が22才か24才だった。」と、真剣な感想。「先生が19才でもてたのか、私も気になります。」「全部、おもしろくて笑っちゃった。」というものも。名前占いの本を見ているときも、みんなで詩を読み合ったときも、笑いが絶えない時間でした。「明日は何が起きるかな？」と楽しみになります。

センターの動き

〈4月〉
8日　第1回事務局会議
18日　ゼミナールSirube「ワロンの子どもの『思考』論①」
23日　「教育」を読む会
24日　道徳と教育を考える会（伊藤仁斎―古学の倫理思想）
25日　『研究年報2022』完成・発刊
29日　みやぎの会総会・山本由美さん教育講演会
30日　第4回不登校の子ども支援団体「有志茶話会」

〈5月〉
7日　作文講座、会場（宮教大）下見・打ち合わせ
10日　こくご講座世話人会
20日　第2回事務局会議
23日　ゼミナールSirube「ワロンの子どもの『思考』論②」
28日　「教育」を読む会、研究部会

〈6月〉
1日　第1回運営委員会
4日　作文講座、宮教大でオンライン事前テスト
2日　東松島、キボッチャ・石巻西高碑、見学
8日　教育会館理事会
11日　「みやぎ教育のつどい」第1回実行委員会
「GIGAスクール」シンポジウム
12日　民主教育研究所・評議員会
18日　作文講座（宮教大303教室）、宮城作文の会と共催
19日　道徳と教育を考える会（新井白石―啓蒙的儒学の知的世界）
24日　つうしん107号発送、第3回事務局会議
25日　「教育」を読む会、研究部会
28日　こくご講座世話人会

編集後記

4月16日、長野県池田町創造館で宮城・福島の元教員たち6名が親子竹とんぼ教室を行った。40名を超える参加者で大好評だった。池田町には2つの小学校があり、その1校の会染小学校では40年前から「肥後守」（小刀）を1年生から持たせて使わせる教育を行っていると参加した教育委員の方から話を聞いた。流し場には砥石が置いてあり、小刀が切れなくなると休み時間に自分で研いでいる。それが親の代からなので家庭でも肥後守使用が当たり前になっているという。

竹とんぼ教室では、その学校からの参加者は、児童も保護者も肥後守を持参して竹を削っていた。低学年の女の子が上手に削っている。お母さんも子どもたちに肥後守を使う姿を見せていた。この教室には竹とんぼを2年間追究してきた信州大学附属長野小学校の卒業生も参加してくれた。「肥後守」教育も「竹とんぼ」教育も人として生きていく大切な教育を行っていると感じた。

GIGAスクールについての3回目の特集、鎌田さんの論考、小野寺さんの米作り実践など「教育にとって大切なことは何か」を考えさせられます。（達）

発行：(一財)宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター　2022・6・25　発行責任者：高橋達郎
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45 フォレスト仙台4F　TEL 022-301-2403　FAX 022-290-4026
http://mkbkc.forestsendai.jp E-mail mkbkc@forestsendai.jp　印刷 株式会社きた出版